



♥♥文庫あれこれ♥♥◆クリスマス・ローズってクリスマスにだけ咲く花だと思っていました。クリスマスに語るおはなしでしか知らなかった私は。森川さんがお庭から届けてくださり今、文庫のトイレに飾られています。◆今月は、文庫の蔵書点検と本のデータ入力のため、数日間づつ、2度こちらに来ました。山焼きも見ました。庭の河津ざくらの見頃も楽しみました。功德、功德。◆貸出中のものを除いて5000冊以上の本の作業は、毎日5人の方のご協力でご協力より早めに終了。文庫のお二人のほか、今回の大立者Nさん、Tさん、Oさん、Iさん、Aさん、ありがとうございました。近いうちに、借りた本がどんな書名だったかわからない、などということはありません。いずれ、蔵書リストや、ジャンル別リストなどを作成できるようにしたいと思います。ソフトを作成してくださったNさん、よろしくお願いたします。◆今回、蔵書点検してみて、見つかったのは、複本(同じ本)。いただいてふえたのならまだしも、リストがないため、ついつい、再度購入してしまったということ。よく読まれる子どもの本ならいざ知らず、その分もつと、ほかの本を入手できたのに、は後の祭り。こんなことのないようにします、できます、これからは!◆それから、助っ人さんたち連発。あーら、こんな面白そうな本が。そうです。本というものは元来、奥深い性格で、みずからは自分の存在をアピールせず、誰かが見つけてくれるのを待っているのです。その掘り起こし作業にも、今後は役立ってくれるはずで、このシステムは!◆でも、読書家の楽しみは、書架をブラウジングして、そこはかとない、本の色目といましようか、何気ない自己表示に気づくことですね。みなさんが、楽しくそんな出会いができるよう、配架にも気を配り、書架の表示ももっと見やすくしたいと、文庫係一同、考えております。何しろ、わが文庫には、本にさわっていられば幸せ人間が揃っておりますので。◆今回は、昨年度出版され、よい評価を受けた児童書、特に絵本をたくさん入れました。小さい人たち、読んでね。そして、嬉しい寄贈本も届きました。(西村)

“ “これからの催し物のお知らせ” ”

春よこい・スペシャル

子どももおとなもおはなし会

日時 3月22日(日)午前10:30~11:30

おはなしのベテランおばあちゃんおふたり来館

平塚ミヨさん・古市静子さん

★伊豆高原・わらべ絵館開館5周年記念のイベントとして、3月21日(土)夕方から、『おとなのための夜語りとフルートの夕べ』があります。(詳細は、直接、わらべ絵館にお尋ねください。定員30人です、お早めにお申し出ください。)語り手は、上記・平塚さん、古市さん、西村です。フルートは伊豆高原在住のお父さん方だそうです。(うぐいすの宿、サルとひき蛙の競争い、太陽の木の枝の昔話と、2部、フルートは懐かしいわらべうたなど。おはなしは、志賀直哉の短篇とアンデルセンの創作ものです)。何だかたのしそうですね!

♥♥5月アートフェスティバルには、おはなし会のほかに、期間中、ミニ絵本原画展・絵本展+図書館を使った調べる学習賞優秀作品の展示会を開催の予定♥♥

☆☆2009年前半の開館スケジュール☆☆

- ◆3月も変則第4土日(21、22日)です。
- ◆4月も変則になりました!(ごめんなさい) 第4土日(25、26日)です。
- ◆5月は10日~17日まで開館。開館時間午前10時~午後3時。土曜は午後2時~5時迄。
※文庫の時間:通常、土曜日は午後2時~5時、日曜日は午前10時~午後3時
※毎月開館日の日曜は、「子どものための小さなおはなし会」があります。午前10:30~11:00
◆文庫開館日は通常、毎月、第3日曜とその前日の土曜日の2日です(従って第3土曜日でなく第2土曜日ということもあります)。
おはなしの勉強会は、
3月、4月とも、開館日の土曜11:00~です。

沙羅の樹文庫だより

No.30

(2009年2月号)



(ブロンズ新社)

このだるまさんシリーズ、読んでみてください。心がほおつ!

ああ どこから

庭を とおって
 ゆうびんやさんが かえっていく
 きょうも みおくっているのは
 屋根の スズメと かきねの デンデムシだ
 ごめんよ
 きみたちあての てがみは 来てないんだ
 というように
 ゆうびんやさんは そそくさ いっちゃった
 ああ どこから こないかなあ
 葉の花びらのような 手がみと
 まめのような こぶつみが
 ゆうびんって
 スズメたちに デンデムシたちに
 (まど みちお作)

紹介 大人の本・文庫にある本

1月にお借りした本についての読後感

①『文明の衝突』(サミュエル・ハンチントン著)

この本は、私が今最も興味を持っている歴史を踏まえた世界のマクロ的展望ということに関しては、エマニュエル・トッド「帝国以後」、フランシス・フクヤマ「歴史の終わり」と並んで必読書の一つ。554ページの大冊だから読むのは一仕事だが、読んで得したと思える本だ。因みに、エマニュエル・トッドはハンチントンに対抗するように「文明の接近」(「イスラーム VS 西洋の虚構」という本も書いている。ハンチントンがイスラームと西洋との対立は不可避と見るのに対し、トッドはそうは考えない。イスラームも変わって行くと言うのだ。(集英社版)

②『日本語が亡びるとき』(水村美苗著 筑摩書房)

水村美苗の名は、辻邦生の著作を通じて聞いてはいたがこの人の本は初めて読む。一方にインターネットとグローバル化で決定的に「普遍語」となって圧倒的な力であらゆるものを呑み込みながら拡がり行く英語の存在、他方では素晴らしい文学を生み出した奇蹟ともいべき優れた「書き言葉」としての日本語が日本人自身に軽視され忘れ去られようとしている、この両端を対照しながら、日本語の運命を鋭い問題意識と深く広い言語に関する知識で突き詰めてゆく。最後の第7章「英語教育と日本語教育」なんかではもう著者の思いつめた悲鳴と絶叫が聞こえてくる思いだ。

水村美苗は出した本全て何かの文学賞を受賞しているということだが、これもきつと何か授賞するに違いない。ご主人はこれまたユニークな経済学者 岩井克人らしいが、うーん、なるほど。

③『大東亜戦争の実相』(瀬島龍三著 PHP 研究所)

この本を読むと、つい最近大きな話題を呼んだ田母神俊雄「日本は侵略国家であったか」という論文を思い出さざるを得ない。

しかし、昭和14年に大本営陸軍参謀となりその後関

東軍参謀に転じ、敗戦後ソ連に昭和31年まで抑留され、帰国後伊藤忠の会長に就任した瀬島氏のこの本は、昭和47年(1972年)11月にハーバード大学の政治行政の大学院「ケネディスクール」における講義の草稿をPHP研究所が出版した本であるが、史実を詳細・精密かつ正確に記録したもので、思い込みが多く自説を強く主張する田母神論文とは全く種類を異にする貴重な記録である。

④『編集者という病い』(見城徹著 太田出版)

見城さん、これはちょっとひどいね。同じことを10回も読まされるなんて! こんな雑な「編集」の本を売り出す「編集者」の神経には呆れてものも言えない。唯一面白かったのは 鈴木いずみとの交友関係だけだった。鈴木いずみなんて知っている人はあまりいないでしょう。私は偶然にも伊東市の図書館で彼女が伊東高校の、きらめくような才能はあるが、どこか陰のある文学少女だったことを知っていた。東京に出て、文学に惹かれながらも自分の中にある魔的な衝動に突き動かされて暗い穴の中に落ちてゆく。見城氏に必ず返事の電話を下さいと電話で言い残し、見城氏が放置していたら、暫くして同棲していたジャズ演奏者の男との間にできた子供の目の前で首を吊って自死したという。見城氏に「長く生きてると、人生って淋しいですね。」と言っていた鈴木いずみ、享年36歳。

ふと随分昔に読んだ富士正晴の小説「偽・久坂葉子伝」を思い出した。久坂葉子は実在した神戸の恵まれた家庭の文学少女で、富士の主宰していた関西の代表的な同人誌「バイキング」で活躍していたが、或る日自殺してしまうのである。

おかしな本を読んでいて、とんでもない脱線になってしまった。他に2冊お借りしたが、これらの感想はまた別の機会に。
(奥野禎一)

『江戸風流さんぽ道』(杉浦日向子著 (小学館文庫)) + 『シュリーマン旅行記』(ハインリッヒ・シュリーマン著 石井和子訳(講談社学術文庫))

『ぼうけんしマウス』(齊藤洋作 理論社)を読んで

ぼくがこの本をえらんだりゆうは、『ぼうけんしマウス』という名がおもしろそうだったからです。

たびに出たねずみが、船の中で、目てき地についたらすてられてしまう、あなのあいたバケツとシャワーのとってをたすけるために、わざと船のりからおいかけられて、そのバケツの中にかくれて、ねずみがあなからにげられないように、そばにあったシャワーのとってをさしこんで、バケツとシャワーにとってで、じょうろとしてつかえるように気づかせたり、ホテルのはしらにかかっている150年前の時計を、ねないでちゃんとうごかし、スルカきょうわ国の大とうりょうがその時計をもらうことになって、すてられずにしてあげたり、とてもやさしいねずみだと思いました。おもしろい本でした。

(秋吉たかひろ)

かなり前になりますが、テレビの時代劇のあと、和服を江戸風に着こなした著者が、江戸の町人の生活を解説しておられました。短い時間でしたが、もっとその先が聞きたいと思うほど興味深いものでした。

この本は、まさに江戸の町人の日々の生活が目の前に広がります。それにも増して、興味深いのは、寺子屋という教育のありようです。どの子どもも手紙の書き方と礼儀作法以外は、子どもの自主性にまかせ、教育が大人の押し付けではなく、多様な社会のニーズにあったものだったことに驚きました。また、火事や洪水、地震に度々遭っていますが、その危機管理のシステムは非常に質が高く、目をみはる思いです。当時の衣・食・住とその暮らしぶりに興味のつきる事はありません。

幕末に、トロイ遺跡を発掘したシュリーマンが、清国(中国)から日本を訪れ、ありのままの日本の情景を偏見にとらわれず、客観的に書いています。この2冊を読むと、私たちは、素晴らしい文化と歴史を残した先人たちのあとを生きているという誇り高い気持ちになります。暗いニュースの多い昨今、私たちは、素晴らしい資質と能力のある民族である事を、子どもたちに伝えたいと思います。
(福岡 恵)